

中部の

エネルギーを築いた人々

名古屋電灯の礎を築いた
電気技術師 丹羽正道

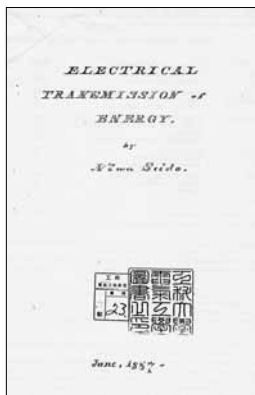
中部地方初の電気事業である名古屋電灯の技術的基礎を築いたのは電気技師丹羽正道である。丹羽正道は、文久3年6月、尾張藩の儒者丹羽氏任の長子として生まれ、愛知県中学校を出て上京し、大学予備門(第一高等学校の前身)を経て、明治14年4月、工科大学電気工学科に官費生として入学した。学生時代には、エジソン会社の技師コングトンに従って、わが国電灯点火の濫觴である内閣官報印刷局(明治19年6月)や大阪紡績三軒家工場(明治19年9月)の電灯工事に携わった。



丹羽正道

津・名古屋での電気灯点火試験

明治20年7月、工科大学卒業と同時に名古屋電灯に入社した。明治19年11月、三重県庁



丹羽正道の卒業論文
Electric Transmission of Energy

で開催された天長節会のアトラクションとして、電気灯試験点火の実演が行われた際、丹羽正道も出張・参画していたことがきっかけとなった。津での電気灯試験点火に続き、名古屋区役所でも実演点火(11月26日～)が行われ、「灯光爛々四を射て人目を驚かし」と評された。当時名古屋では士族授産事業として電灯事業が検討されていたが、

これを機に、電灯事業への気運が一気に高まり、名古屋電灯が創設(明治20年9月)され、丹羽正道は技師長に就任した。県の衛生課長で、士族授産事業(電灯事業創設)の責任者となっていた丹羽精五郎は、正道の叔父でもあった。尾張藩士族出身者に、正規の電気工学を履修した技師のいたことが電灯事業創設をスムーズにした。



丹羽精五郎

名古屋電灯会社技師として

名古屋電灯入社後、丹羽正道と叔父精五郎は明治20年10月から翌年4月まで、電気機械調達のため、米国・欧州を廻った。米国では発明王エジソンを訪ね、親しく指導を受けるとともに、研究所内を案内して貰ったり、発明したばかりの蓄音機に声を吹き込んだりしたという。発電機は、エジソンの紹介でドイツAEGからの購入が決まった。

帰国後、市内南長島町(現在電気文化会館)に中央発電所の建設が進められた。当時の技術状況を反映して直流式が採用され、エジソン型10号(25kW)4基を備える火力発電所であった。白熱電球を積んだ輸送船がスエズ運河付近で沈没し、関係



名古屋電灯発電所(濃尾震災直後)

者を心配させたが、明治22年12月、中部地方初の電灯会社(全国5番目)として開業し、名古屋に文明のあかり電気灯を点した。

周辺電気事業への貢献と大阪電気鉄道への貢献

名古屋電灯会社が軌道にのったあと、丹羽は他地域の電灯会社創設にも協力している。岐阜電灯(明治27年5月)の主任技師となり、四日市電灯(明治30年9月)の電気設備の設計を担当したが、いずれも直流供給方式が採用された。名古屋で衛生大会(明治26年)が開催されたおり、来名した仙台電灯(計画中)の関係者が名古屋電灯を訪れたのがきっかけで、仙台電灯創設にも協力(明治27年2月訪問)した。

丹羽は、明治32年7月、名古屋電灯を辞して、大阪に丹羽工務店を開設した。大阪では市営の電気鉄道を計画していたが、市長鶴原定吉の懇請で市営電気鉄道の主任技師となり、西区花園橋から築港までの敷設工事(明治35年)等に携わった。大正5年には、電



丹羽正道墓石(八事墓地)

車のカーブ運転の重要な技術であるダイヤゴナル・ラジヤル車台を発明し、鉄道技術にも貢献した。晩年は名古屋に戻り、昭和3年1月、66歳で逝去した。墓は市内八事墓地にある。

(浅野 伸一)